

Title	表紙 ; Contents
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2008
Jtitle	Newsletter Vol.5, (2008. 10)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000005--001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Newsletter

2008 October No. 5



Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

科学者コミュニティの「常識」

北海道大学大学院文学研究科教授
心の社会性に関する教育研究拠点・拠点リーダー

山岸俊男



21世紀COEから数えれば、COEプログラムはそろそろ7年目を終わろうとしています。21世紀COEで構築した基盤をもとに、社会に対して貢献できる成果を生み出していくというのが、グローバルCOE拠点が今後果たすべき役割だと言えるでしょう。もちろんそれぞれの拠点は独自の研究・教育目標の達成のために、日夜努力を続けられているのだと思います。しかし、それぞれの拠点がそれ独自でいくら頑張っても達成できないこともあります。それは、研究と教育に関しての「常識」——科学者コミュニティについての常識——を変えるということです。

科学の発展は、科学者のコミュニティがなければ成り立ちません。いくら優れた発見をしても、その発見を追試し、またその意義を理解してくれる科学者コミュニティがなければ、その発見はなかったのと同じことになってしまいます。また科学者の間の知的な競争も、科学者コミュニティがなければ生まれません。この意味で、科学の発展を支えるのは一人ひとりの科学者の努力であると同時に、科学者コミュニティのあり方にあります。残念ながら、これまでの日本における心の研究が国際的に大きなインパクトを持ちえなかった一つの理由は、日本において心の研究に携わっている科学者のコミュニティが、より大きな世界のコミュニティから相対的に孤立していたからだと考えられます。これは多分、日本のコミュニティが世界からの相対的の独立を維持するのに十分なだけ大きく、世界のコミュニティに参加するためのインセンティブに欠けていたためでしょう。それが、科学者コミュニティについての「日本的」な常識を生み出してしまったのだと思われます。

21世紀COEとグローバルCOEには、心の研究に関して世界の先端研究を担う研究者の育成をめざす4つの拠点——慶應義塾大学、京都大学、お茶の水大学、北海道大学——が採択されています。それぞれの拠点の内部では、この日本的な常識が変わりつつあり、科学者コミュニティが世界に対して開かれたものである、逆にいえば、一人ひとりの研究者は世界中の科学者コミュニティに属しているのだという認識が、大学院生や若手研究者の間で常識となりつつあります。この常識の変化を心の研究にかかわる科学者全体に広げることが今後4拠点全体に対して求められることであり、そのためには4拠点の間の連携が必要となるはずですが、これまでも拠点間の連携に対して推進役を務められてきた慶応大学拠点には、4拠点の連携に向け、今後もこれまで以上に大きな役割を果たされることを期待します。

Contents

科学者コミュニティの「常識」	1
2008年度 Keio-Cambridge Joint Seminar 報告	2
World Congress of Philosophy に参加して	3
慶應義塾創立150周年記念ニューロサイエンス・シンポジウム -From molecule to cognition-	4
論理的観点からのメンタルロジック理論の再検討	5
活動報告	6
研究員紹介	8